

| | |
|------------------------|--|
| 氏 名 | 工 藤 和 也 |
| 学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称 | 博 士（言語学） |
| 学 位 記 番 号 | 甲文第108号（文部科学省への報告番号甲第368号） |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 学位授与年月日 | 2011年3月3日 |
| 学 位 論 文 題 目 | Argument Realization and Alternations : A Theoretical Investigation on the Syntax-Lexical Semantics Interface |
| 論 文 審 査 委 員 | （主査） 教 授 浦 啓 之 （副査） 教 授 小 川 暁 夫 准教授 楠 本 紀代美 小 泉 政 利（東北大学大学院准教授） |

論 文 内 容 の 要 旨

工藤和也氏の学位申請論文は、文内の述語が取る項の文法関係がその述語の語彙的な意味により予測可能であるとする語彙意味論の枠組みの下、ある述語の意味構造と統語構造との関係を一般化することを目的とする。実証面では、英語や日本語における様々な項の具現化の様式を、言語普遍的な連結規則（およびその下位特性である写像の仕組み）と言語固有の語彙意味表示との組み合わせによって体系的かつ包括的に取り扱う。

本論では、事象の主辞性（event headedness）などの意味的な制限が、人間の語彙的な知識が語彙部門でどのように組織化されているかを理解するための基本的な枠組みを提供するだけでなく、述語が取る項を適切な統語位置に基底生成するための写像の仕組みを確立するものであることを主張する。その帰結として、話者の経験によって後天的に獲得される語彙部門が、言語能力によって生得的に与えられる統語部門よりもより構造的により豊かで複雑であることを示唆し、両者の対応関係は前者から後者への「最適な接近（optimum approximation）」として形式化されるものであることを結論する。この結論に基づけば、同一の述語の項の具現化の様式が変化する所謂「構文交替」についても、単一の語彙意味表示から複数の統語表示への写像として捉えることが可能になり、述語の語彙意味表示を生起する構文に応じて無限に拡張する必要がなくなる。さらには、すべての言語で同様の写像のメカニズムが適用されていると仮定することにより、様々な言語における項の具現化の違いを、一様にその言語のレキシコンにおける語彙意味表示の違いに還元できる。

より具体的には、各章では以下のことが示される。1章では、文法領域における統語部門と語彙部門との妥当な関係性を議論し、語彙項目が持つ基本的な意味の創造性や浸透性を説明可能な生成的なレキシコンのモデルを検討する。2章では、生成的なレキシコンの内部構造として、語彙項目間の差異対立を表示可能な語彙意味表示の有り様として提示する。3章では、2章で提示した語彙意味表示を統語表示へと写像する適切な連結規則を提案し、これによって述語の基本的な統語構造の違いを意味構造の違いに還元する仕組みを提供する。4章では、英語や日本語における項の具現化の交替を、語彙意味表示内の意味情報の一部を選択的に統語構造に写像する「選択写像仮説」によって説明し、述語の統語構造と意味論・語用論との接点を明らかにする。5章では、本論文が提案する選択写像仮説が、項の具現化に対する言語内および言語間の変種（variation）を説明する有効な手段であることを議論する。6章では、本研究の重要な

帰結として、述語の語彙意味表示を変更することなく述語が取る項の変数 (variable) の値を変える語彙操作が、英語に見られる多種多様な構文交替を過不足なく説明するという可能性を実証的に追求する。

論文審査結果の要旨

工藤和也氏の学位申請論文は、英語の様々な構文において観察される構文交替現象を網羅的に取り上げ、理論言語学（とりわけ語彙意味論と生成統語論）による詳細な解析を試みることを分析の中心に据えて、そこで与えた理論的提案を日本語など英語以外の言語にも随時適用しながら、それらの現象には人間の言語能力の奥底に隠された語彙構成にかかわる普遍的メカニズムが存在するというを明らかにしようとしたものである。

構文交替現象とは、二重目的語構文⇔直接目的語 + *to*-前置詞句補部が真理値を変えずに交換可能であることで代表されるようなものであるが、係わっている動詞に付随する目的語や補部・付加修飾語句の統語構成上の配列が論理的意味を変えずに交代する現象のことである。この現象は従来より盛んに研究されてきたトピックではあるが、単語の意味が文章構造にどのようなかわりを持つのかという非常に大きな問題と直接的に関係しているものであるので、多様な提案がなされてきた反面、どの提案にも欠陥の問題点が存在し、解明されたというには程遠いものである。

本博士論文で工藤氏が行った分析を簡潔に述べれば、動詞に代表される述語が示す事態・事象にはそれを意味的に規制する制約が人間の言語認知のシステムには存在することを提案し、その制約がおのおのの述語のもつ意味特性に作用することで様々な構文交代の起こるメカニズムを解明しようと試みている。より具体的には、語彙の内部構造として語彙項目間の差異を表示することのできる枠組みを用いて語彙の意味を統語表示へと写像する適切な連結規則を提案し、これによって述語の基本的な統語構造の違いを意味構造の違いに還元する仕組みを示すことで、英語や日本語で観察される構文交替現象の起こるメカニズムを説明した。

本論の最も評価されるべき点は、従来より非常に大きくまた大変難しいとみなされていた問題に対して果敢に挑み、上述のように理論的に統一された一つの観点からメカニズム解明の道筋を示したことであり、このようなアプローチはほとんどなされていない理論言語学の現状を考えると、このことは本論の価値を非常に高いものにしていただいているところであると言える。更に本論で工藤氏は、英語・日本語における構文交替現象のみならず、上述のようにさらに多様な言語の広範な現象に対しても提案した理論的仮説が適用可能であると示唆することによって、その仮説の経験的・理論的射程の深さ・広さを示すことに成功している。このように、広範な言語と現象に対して統一的な説明を与え得る理論的仮説の存在を示しその内容を明らかにしている点は非常に高く評価できるといえるのが、本論文の審査員全員の一致した意見である。

このように、工藤氏の学位申請論文は極めて高い学術内容を持つものであるが、問題点が一切無いというわけではない。本論は非常に広範な構文交替現象を取り上げるが故に、個々の述語や特定構文の交替現象に対してはきめ細かな観察分析は疎かにされていると言わざるを得ず、取りこぼしているデータが若干散見された。また、人間の言語認知のシステムに係わる大きな理論的仮説の提案であるが故に、その理論内における理論的整合性を保つことは非常に難しく破綻が明らかな箇所も少なからずあり、これらの問題点の整備・修繕が今後の課題であると言える。しかし、これらは学問的に博士論文に求められるものを超えるより高いレベルの要求であると言え、本論の博士学位請求論文としての価値を損なうものでは決してない。

本論の審査委員四名は、論文の審査ならびに2011年2月17日に実施した口頭試問の結果から、工藤和也氏が本論文によって博士（言語学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告いたします。